◇現代社会と青年◇

若者の「仕事観」の育て方

室舘 勲（むろだて いさお）
（株式会社キャリアコンサルティング代表取締役社長）

某私立大学生百人に対する、働くことに関するアンケートの結果。九割の学生が「社会に出ることに対して不安がある」「できれば働きたくない」と答えたそうです。最近は景気が上向きだというニュースが増えたこともあり、前向きな方も少しはいるようですが、学生が社会に出る際に持つ不安は三十年前とほぼ変わりません。

一方、弊社キャリアコンサルティング（以後キャリア）に通う学生の大半は「不安はなく、楽しみだ」と答えます。しかし、彼らも、はじめから前向きだったわけではありません。大学二年次、三年次には、社会に出ることに対する不安があったそうです。なぜなら「周りの社会人が愚痴を吐いている」「社会に出た先輩たちが、つまらなそうだった」からだそうです。

彼らの不安が解消されたのはなぜか。それは、キャリアに通うようになって、キャリアの社会人たちとの交流を通して希望が持てるようになったことがあるそうです。キャリアに通う社会人は、明るく元気で仕事を楽しんでいる人が多い。キラキラした女性、艶のある男性。そういった方々に触れることで、自分の将来像が明るくなっていったと言います。

「案外単純な話だな」と思うでしょうか。これは学生に限った話ではありません。人は身近な人の影響を相当受けるようです。永平寺を開いた道元禅師は、

「霧の中を行けば覚えざるに衣湿る。良い人に会えば覚えざるに良い人になる」

という言葉を残しています。ビジネスで言えば、新米社員がトップ営業マンのカバン持ちをして、その一挙手一投足から言葉にできない「何か」を学ぶ「ベンチマーク」といったところでしょうか。

学生や新入社員に、仕事へのチャレンジャー精神を持たせるために「〇〇するべきだから頑張りなさい！」という「べき論」による指導は、もはや古いと考えています。少し年上の先輩が憧れられる魅力を持ち、ロールモデルとなって仕事への姿勢を示すことが、シンプルで早いでしょう。

デール・カーネギー著『人を動かす』の一節にもあります。

「人を動かすには強い欲求を起こさせる」

若者の仕事観は身近な人たちの魅力と、彼らの仕事観が育てていきます。憧れられる小さなヒーローが、一人また一人と育っていくことを願っています。